

氏名	上 地 敏 彦
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1452号
学位授与の日付	平成8年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	平安朝物語に於ける管絃描写の文芸的研究 ——構想上の視点より——
論文審査委員	教授 工藤 進思郎 教授 下河部 行輝 教授 狩野 久 教授 延味 能都

学位論文内容の要旨

本論文は、平安時代の物語の中に数多く見受けられる管絃描写が、王朝貴族たちの美風や才芸の一面を伝えるだけに留まらず、作者の創作意識の基幹をなす物語の構想にどのように関わっているかを、宇津保物語・源氏物語・狭衣物語・夜半の寝覚・浜松中納言物語などの長編作り物語について考察し、その文芸的意義を主に構想との関わりにおいて解明しようとするもので、全7章にわたる精緻な論文である。

第1章 宇津保物語の管絃に関する回想表現の構想的意義

物語の構成上、ある意図のもとにある意義を担わされた過去印象の再生たる回想表現は、宇津保物語において主たる会話文で41箇所認められる。内容的には、楽芸相伝への賛美・秘伝固守への感懐が15例、形式的には嵯峨院と朱雀帝の会話文が20例あって、その点からも宇津保物語は俊蔭一族を媒体とした琴による芸術至上主義的な作品であることが明らかになる。ただ、その外に恋情・嫉妬・婚姻問題・肉親愛等に関わる回想表現も26例が認められるのは、音楽奇瑞の面から伝奇物語とされているにもかかわらず、この作品が管絃面でもきわめて現実的な構想によって成っていることを証するものと言わねばならない。

第2章 宇津保物語が源氏物語に及ぼした構想上の影響について —管絃関係記述を中心として—

源氏物語における〈桐壺帝—光源氏—女三宮—薫〉という七絃琴の相伝や、〈醍醐帝—前大王〉—明石入道—明石君—明石中宮〉という箏の相伝のモチーフは、宇津保物語における〈七仙人—俊蔭—俊蔭女—仲忠—犬宮〉という秘曲相伝の構想に依拠したものであり、さらに七絃琴の権化ともいべき明石一族の物語構想に認められる音楽伝承譚と恋愛譚・出世譚との結合の形態、若紫巻における北山の段、須磨・明石両巻における光源氏の神人的性格と弾琴、末摘花の孝子的性格と弾琴等のモチーフも、宇津保物語に依拠したものと考えられる。このように管絃関係記述を主要なものとして、源氏物語は宇津保物語から構想面において多大の影響を受けているのである。

第3章 源氏物語の夕霧—落葉宮の構想に於ける管絃関係記述の意義について—

夕霧巻に描かれた「まめ人」たる夕霧の落葉宮に対する強引な求愛行動については、横笛巻までの夕霧とは全く趣を異にしていると見るのが一般的である。しかし、管絃関係記述に着目すると、作者は、若菜上巻に描かれる夕霧の音楽鑑賞力や、無風流な妻雲井雁への不満の心理をもって伏線とし、横笛巻に入って落葉宮の琴の音を聞き、わずかに想夫恋の曲を合奏する描写をもって十分な恋の契機とすることによって、夕霧巻における行動を必然たらしめていると考えられるのであり、そこに唯美主義的な時代の感覚を確認することもできるのである。

第4章 源氏物語に於ける管絃関係記述と末世構想

源氏物語には末世衰退の時流に関わる認識面の際立った表現が33例見受けられるが、そのうち28例は管絃に関わるものである。これら管絃関係記述は、宇津保物語とは正反対に若菜上巻より顕現されるところの末世構想の明確な徴証と言える。これはまさしく熊沢蕃山が『源氏外伝』において説いたごとく、「万の事世の末に成行ば上代の美風衰へて俗に流ん事を歎き思ふ」作者の高雅な精神による作意と言わねばならない。

第5章 源氏物語に於ける管絃表象語句とその意義についての一考察

光源氏と末摘花・明石御方との恋愛構想における管絃表象語句は、管絃にまつわる〈愛着〉〈希求の念〉〈秀逸・高度な技芸〉〈美的情趣〉〈技芸美への感嘆の念〉〈技芸美へ

の魅了状態〈季節・自然との調和〉〈余情重視の念〉等のイメージ・内容を表わすものとして多種多様にわたっている。それらは末摘花巻関係では人物像・性格を表わすとともに恋の構想に深く関与し、須磨・明石両巻関係では流人同然の源氏に関する心理や理想性保持の描出、明石一族との結びつきの構想等に多大な役割を果たしている。

第6章 源氏物語に於ける「大和魂」と和琴

— 技芸による人格・能力表象とその構想的意義について —

源氏物語の主要人物のうち、和琴の名手とされているのは頭中将・柏木・薫・玉鬘・紫上・落葉宮の6人であるが、男子の場合は政務・公務の実務面に有能であり、女性の場合は一家を治め斉える実務的な才能と度量面に秀でていたというように、共通して世才的な才覚と人心を掴む能力とに長けている。これはちょうど和琴を魅力的に弾き得る能力の本質と相通じ、さらには乙女巻に見える「大和魂」の概念とも合致すると考えられる。よく人心を捕らえ、主体性をもって物事を的確に処理し得る実務上の能力＝大和魂に長けた彼らは、古風な和琴の演奏において自在に清新かつ多彩な音色により人々を魅了する楽才の持主でもあった。源氏物語において和琴演奏を讃える描写は、構想上、その人物の「大和魂」的で現実的な性格・能力・血統の美質といったものを表象する役割を担っていると考えられるのである。

第7章 平安朝後期物語に於ける管絃関係記述の構想的意義について

浜松中納言物語では河陽景の後・唐の一の大臣の五君・吉野姫等への恋の構想において、また夜半の寢覚では寢覚上への男主人公・宮中将・帝の恋の構想において、さらに狭衣物語では女二宮・宰相中将の妹君・源氏宮等への恋の構想において、それぞれ出逢いの契機・発展等の物語的方法として管絃関係記述が生かされており、平安朝中期以降の物語における管絃素材を重用する恋愛構想上の美的伝統様式の定着を確認できるとともに、宇津保物語および源氏物語の管絃場面からの影響も数多く指摘し得る。

結語

物語中の管絃描写かいはし管絃描写がそれぞれの作品の構想面に果たしている意義に着目し考察した結果をまとめてみると、ほぼ次のごとくである。

- (1) それ自体が音楽伝承譚を構成する。(宇津保物語・源氏物語)
- (2) 恋愛譚の構想の要因となる。(宇津保物語・源氏物語・狭衣物語・夜半の寢覚・浜松中納言物語)
- (3) 出世譚の構想の要因となる。(宇津保物語・源氏物語・狭衣物語)
- (4) 回想賛美構想の要因となる。(宇津保物語)
- (5) 末世構想の要因となる。(源氏物語)
- (6) 後統の物語に構想上の影響を及ぼす。(宇津保物語)
- (7) 管絃表象語句が主要モチーフにおける人物の心理・行動・状況およびその変化等を明示する。(源氏物語)
- (8) 楽器の特性およびその技量が、構想上重要な人物の性格・能力を表象し、彼らの造型と活動を自然で必然性あるものと実感させる。(源氏物語)

このように管絃描写は、物語の主要な人物の内面と造型に決定的な意味を有し、構想上多大な役割を果たしているのである。

論文審査結果の要旨

筆者は昭和51年3月、岡山大学大学院文学研究科修士課程(国文学専攻)を修了、修士論文は「宇津保物語と源氏物語の影響関係について—音楽を中心として—」であった。爾来、福岡県内の高等学校等で教鞭をとるかたわら、主に平安朝物語の研究に取り組み、学術誌に掲載された論文は少なくないが、わけても「源氏物語における音楽描写の意義—夕霧と落葉宮の物語を中心として—」(『岡大國文論稿』第5号、昭和52年3月)、「宇津保物語が源氏物語に与えた影響について—音楽関連描写の構想を中心として—」(『平安文学研究』第65・66輯、昭和56年6月・11月)、「平安朝後期物語における音楽関連描写の構成的意義について」(同第67輯、昭和57年6月)、「源氏物語における音楽関係記述と末世思想」(同第73輯、昭和60年6月)、「宇津保物語の管絃に関する回想表現の意義についての考察」(同第75輯、昭和61年6月)等のように、源氏物語を中心に長編作り物語の管絃描写に注目した一連の研究を精力的に進めてきた。平成5年4月、岡山大学大学院文化科学研究科博士後期課程(人間社会文化学専攻)の第1期生として入学後も、引き続き平安朝物語における管絃描写ないし管絃関係記述に関する研究に精励し、「源氏物語における管絃表象語句とその意義についての一考察」(『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』創刊号、平成6年3月)を発表した。このたびの学位論文は、これらの公表論文をも踏まえながら新たに書き下ろされたものである。

さて本論文は、平安朝における長編作り物語として現存する宇津保・源氏・狭衣・夜半の寢覚・浜松中納言の5作品を取り上げ、これらの世界に描き込められた管絃描写ないし管絃関係記述が、各作者の創作意識の基幹をなす物語の構想にどのように関わっているかをつぶさに検証し考察したもので、多くの新見と示唆に富む力作である。従来の平安朝物語研究において見落とされがちであった「管絃」という特殊な素材に焦点を絞り、一貫して「構想上の視点」から、その文芸的意義を究明していくところに本論文の独創性が認められる。第2章の素稿となった論文「宇津保物語が源氏物語に与えた影響について—音楽関連描写の構想を中心として—」(上掲)は、音楽伝承譚的な構想が宇津保物語から源氏物

語に引き継がれていることを論証したものとして、すでに学界で認められているところであるが、源氏物語における管絃表象語句について論じた第5章や、同じく登場人物の和琴の才と「大和魂」との関連性を論証した第6章のごときも、視点の新しさとともに筆者の研究者としての優れた能力をうかがわせるにたる部分と言える。平成8年2月1日の学位論文審査会においては、全体にわたり論証が確かであることに加えて、特に上記の点が高く評価され、博士の学位論文に値するものと認定された。

もっとも「管絃」というような特殊な素材を扱うにあたっては、平安時代における管絃の実態そのものについて、しっかりと把握しておく必要があるだろう。そうした音楽史ないし文化史的な側面に関しては、山田孝雄・吉川英史氏ら先学の研究に依っているごとくで、筆者自身による究明は乏しいと言わざるを得ない。「構想」という概念の捉え方がやや曖昧である点と併せて、今後いっそうの研鑽が期待される。